幸福を他民族におしつけるなら

九　カウツキーにあてたエンゲルスの手紙

そのころまだマルクス主義者であったカウツキーは、その小冊子『社会主義と植民地政策』（ベルリン、1907 年）のなかで、1882 年 9 月 12 日づけの彼にあてたエンゲルスの手紙を発表した。これは、いまわれわれの関心を引いている問題にとって、非常に興味ふかいものである。この手紙の主要な部分は、つぎのとおりである。

……「私の考えでは、本来の植民地、すなわちヨーロッパ人の住民が住みついている国々、カナダ、ケープ植民地、オーストラリアは、みな独立するであろう。これに反して、土着民の住民がいる、ただ支配されているだけの国々、インドや、アルジェリアや、またオランダ、ポルトガル、スペインの諸領土は、一時プロレタリアートが引きついで、できるだけ急速に独立させるようにしなければならない。この過程がどうすすむかを言うことは困難である。インドはおそらく革命をおこすだろう。これは、大いにありそうなことでさえある。そして、自己を解放するプロレタリアートは植民地戦争を行うことはできないから、これは成行きにまかせるほかはないであろう。もちろん、このばあいには、あらゆる種類の破壊を伴わずにはすまないであろう。しかし、こうしたことはまさにあらゆる革命につきものの事がらである。さらにほかの場所でも、たとえばアルジェリアやエジプトでも、これと同じことがおこるかもしれない。そして、たしかに、**それがわれわれに**とっていちばんよいことである。われわれには国内にしなければならない仕事が十分にあるだろう。まずヨーロッパや、また北アメリカが改造されれば、それは巨大な力をあたえ、すばらしい模範となるから、半ば開化した諸国民はまったくすすんでそのあとからついていくようになる。経済上の必要だけからでも、そうならざるをえないのだ。だが、そのあとで、これらの国々が同様に社会主義的組織に到達するまでにどのような社会的および政治的段階をとおらなければならないか、それについていま仮説を立てても、かなりむだなものにしかなるまいと思う。ただつぎの一事だけは確かである。それは、**勝利したプロレタリアート**がどんな種類の幸福であれ他民族におしつけるなら、かならず自分自身の勝利をくつがえすことになる、ということである。もちろん、こう言ったからとて、いろいろな種類の防衛戦争を排除否定するものではけっしてない。……」〔第 8 巻、537 ～ 538 ページ〕。

エンゲルスは、「経済的な要因」が、ひとりでに、直接に、あらゆる困難をとりのぞいてくれるとは、けっして考えていない。経済的変革は**すべての**民族を促して、社会主義にむかって**すすませるであろう**が、しかし、そのばあいには、革命――社会主義国家に反対する革命――もおこりうるし、戦争もおこりうる。経済への政治の適応は不可避的に行われるであろうが、しかし、それは一挙になめらかに、単純に、直接に行われはしないであろう。エンゲルスは、ただ一つ、無条件に国際主義的な原則だけを「確かなもの」としてかかげ、それを**すべての**「他民族」に――つまり、植民地民族だけでなしに――適用している。すなわち、他民族に幸福をおしつけることは、プロレタリアートの勝利をくつがえすことを意味するであろう、という原則である。

プロレタリアートは社会革命をなしとげたというだけの理由では、聖人にもならなけれ

ば、誤りや弱点に陥らないという保障もない。しかし、おそらくおかされるであろういろいろな誤り（と、他人の背中におぶさろうとする利己的な私利）は、かならずプロレタリアートにこの真理をさとらせるであろう。

われわれツィンメルヴァルド左派はみなつぎのことを確信している。それは、たとえばカウツキーにしても、1914 年にマルクス主義から排外主義の擁護へと転向するまでは、やはり確信していた事がらである。すなわち、社会主義革命は**もっとも近い**将来にも、この同じカウツキーがかつてもちいた表現をつかって言えば、「きょうあすにも」まったく可能だということである。民族的反感はそう急速には消滅しないであろう。抑圧民族にたいする披抑圧民族の憎悪、しかもまったく正当な憎悪は、なおしばらく**のこるであろう**。それは、社会主義が勝利した**のちに**、そして諸民族のあいだにまったく民主主義的な関係がうち立てられたのちに、はじめて消散するであろう。もし社会主義に忠実であろうとおもえば、われわれは、すでに今日、大衆の国際主義的教育を行わなければならないが、この教育は、抑圧民族のあいだでは、被抑圧民族のための分離の自由を説くことなしには不可能である。　　注)……は本文中の略

第 22 巻『自決にかんする討論の総括』P411~413

1916 年 7 月に執筆

ポイント

エンゲルスは、ただ一つ、無条件に国際主義的な原則だけを「確かなもの」としてかかげ、それをすべての「他民族」に――つまり、植民地民族だけでなしに――適用している。すなわち、他民族に幸福をおしつけることは、プロレタリアートの勝利をくつがえすことを意味するであろう、という原則である。